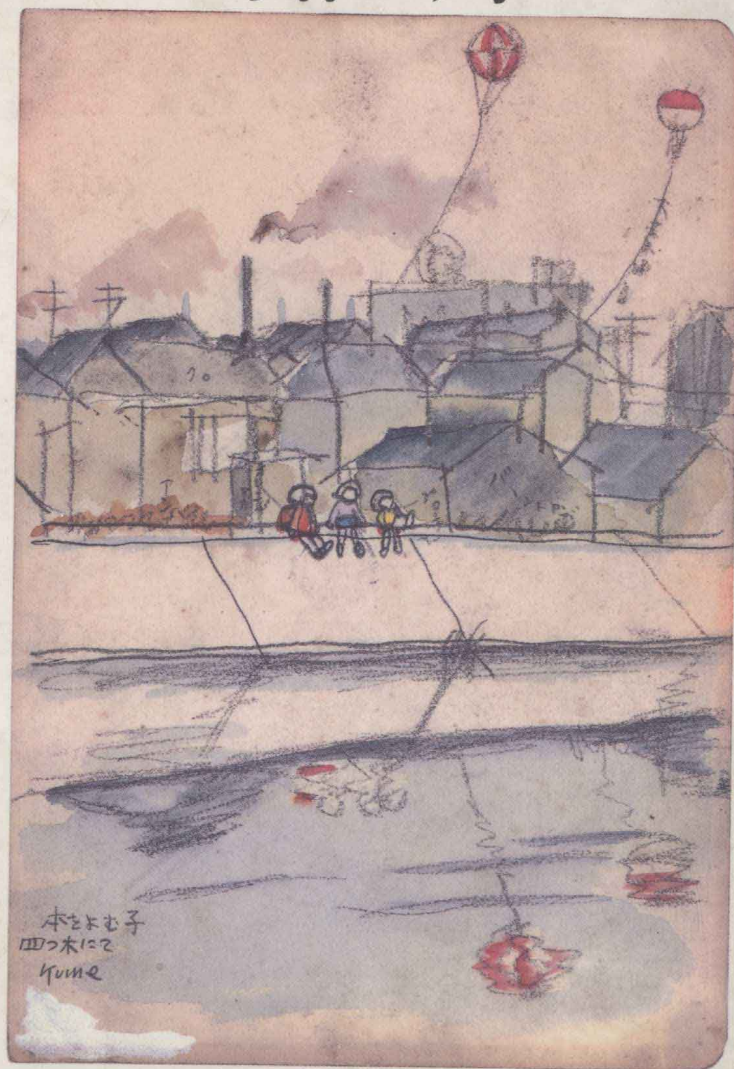


いつもみんなと

"豆タンク"奮戦記

小林マサ子



新日本出版社

いつもみんなと

“豆タンク”奮戦記

小林マサ子



新日本出版社

小林 マサ子 (こばやし まさこ)

1924年2月新潟県生まれ

元衆議院議員

現在、日本共産党中央委員会顧問

いつもみんなと——“豆タンク”奮戦記

1988年9月10日 初版©

定価 1200円

著者 小林 マサ子
発行者 山 本 功

郵便番号 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷 4-25-6

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京 (423) 8402 (営業)
(423) 9323 (編集)

振替番号 東京 3-13681

印刷 享有堂印刷 製本 小泉製本

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。

本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

ISBN4-406-01664-3 C0095

いつもみんなと

“豆タンク”奮戦記

目次

一、病に倒れて……………9

脳シュヨウと知らされ……………11

無念な思いでベッドに……………14

党员としてどう生きるか……………19

まだやることがある、と……………21

二、あだ名は“豆タンク先生”……………27

千住のお化け煙突……………29

思い出の小学生時代……………32

軍国少女への教育……………36

奉公先から脱出して	38
専検を受けて小学校教師に	41
下町の子どもたちとともに	43
差別はいや	46
東京大空襲と学童疎開	48
貧乏と空腹と	52
共産主義ってなに？	56
真実を求めて大学へ	57
入党の決意	61
学習塾の元祖？	65
レッドパージの嵐	67
先生やめないで！	68
子どもたちとの別れ	69
うたちゃんのこと	72

三、寒風のなかで……………79

日雇い労働者として 81

“アブレ”の悲しさ 85

映画「どっこい生きてる」 88

区議会議員に当選 89

自民党の横暴に悔し涙 92

四、子育てと議員活動……………97

三畳一間の新婚生活 99

「血のメーデー」事件で逮捕 100

留置場で気づいた妊娠 104

乳飲子をかかえて 105

働くお母さんの保育所づくり 107

三人の子を育てながら 109

「カギっ子対策」と学童保育 114
小児マヒから子どもを守ろう 118

五、下町住民パワー……………123

貧しさに胸痛める 125
宝物のような時計 131
まかり通る「公安条例」 133

六〇年安保の頃 134

住民のエネルギー 136

区議から都議へ 138

母の思い出 140

六、踏みしめた赤いジュウタン……………145

都民の熱い期待の目 147

大島の生活問題を取りあげて 148

革新都政を実現 152

大師線廃止反対の運動 154

国会へ、九万四千百五十五票の重み 157

新入り議員の品定め 160

金権・田中総理を追及 164

不当な懲罰動議 166

万雷の拍手に励まされ 169

七、いつもみんなと…………… 171

わたしの健康法 173

故郷での快気祝い 174

袋物組合の新年会 177

老人ホームをわが町に 178

あとがき 185

装画・中扉カット
久米宏一

一、病に倒れて



脳シュヨウと知らされ

一九八三（昭和五十八）年八月なかばの暑い頃、わたしは代々木病院から都内の、ある国立病院の脳外科にベッドが空くのを待って入院し、二回にわたって脳シュヨウの手術を受けました。まったく予想もしなかったことでした。

この年は統一地方選挙の年で、各党とも新春早々から活発な運動を開始していました。日本共産党は「地域住民のくらしと郷土の平和、地方政治を守る」政策を発表し、戦後最悪の中曽根政治とその下請け地方政治と対決し、「非核日本宣言」を提唱してたかっています。前半戦の都知事戦、後半戦の区議選、そして六月の参院選と連続してのはげしい政治戦がつづきました。

わたしも一月三日から宣伝カーを走らせ、街頭で新年の挨拶あいさつをしたり、決起集会や演説会に参加したり、夕刻の駅頭宣伝など、当時のメモ帳は分刻みの日程で埋まっています。そうした間をさいて、予算委員会での質問準備に追われていました。

参院選も六月二十六日の投票日まであと三日と迫った終盤戦の二十三日、わたしは朝

の七時から政党カーで東京十区の選挙区内を街頭演説をして回っていました。

一緒に活動していた地元の区議にこの近くでトイレをお借りできるところを知らないかとたずねて、近くの商店街の知り合いの薬局に案内してもらい、お借りすることができたのですが、そのときお店にお客さんがみえていて、奥さんがその応対をしながら、「さあどうぞ」と指さすほうに数歩歩きだしたそのときでした、犬が突然わたしにむかって飛びかかり右腕に噛みつきました。

つないであつた鎖がはずれていたのにまったく気がつかなかったのです。わたしは夢中でトイレのなかに逃げこみましたが、こんどは怖くて出ることができません。思わず大声をあげて奥さん呼びました。驚いてかけつけた奥さんが犬を鎖につなぎ、お店の消毒液をビンの口から傷口に流すようにかけて応急救置をしながら「うちの犬は狂犬病の予防注射はしてありますが、歯にはバイ菌が多いので医者に診てもらってください」と言つて、恐縮していました。のちになって地元の区議から聞いて知ったのですが、その薬局はその日午後からお店を閉めてしまったそうで、気の毒なことでしたと思いました。

わたしにとっては、あの日犬に噛まれたことが直接のきっかけで病氣をはやく発見す

ることになったのであり、いまにして思えば感謝したいような気持ちであります。

あのときは近くの下千葉診療所に急ぎかけつけたのですが、あいにく外科の先生が不在で柳原病院で応急処置をしてもらいました。「安静にしないでないと熱が出る」と言われましたが、案の定その晩高熱を出して翌日、代々木病院で中田先生に診ていただき、右腕の九カ所の犬の歯型の傷の深い何カ所かを切開し、なお狂犬病の予防注射も打ってもらいました。また、しばらくのあいだはガーゼ交換と消毒を毎日行なうことが必要だと言われました。

参院選挙も勝利のうちに終り、東京選挙区の内藤功さんも見事に当選を果たされたので、わたしは院長のすすめもあってしばらく入院してこのさい異常なまでの疲れを癒し、また腕の傷についても治療をもらうことになりました。

こうして、わたしの病気は代々木病院の医師の診察で発見されました。

髄膜ずいまくにかなり大きなシュヨウができていて、それが脳を圧迫していたと知らされて驚きました。その摘出手術が必要だと言われて、大きなショックを受けました。どんなことをしてもやめられないと思っていたたばこが、その日から吸う気にもなれなかったことをみてもどんなに衝撃が強かったかと思えます。

一、病に倒れて

のちに、執刀にあたった脳外科の教授も「これほど大きなショウウができていて、よく高度な知的活動をつづけてこられましたね」と驚いておられましたが、わたしにも信じられないことでした。

無念な思いでベッドに

入院して間もない九月八日に召集された第百臨時国会では、十月十二日東京地裁が下したロッキード事件田中角栄の有罪判決をめぐって解散含みの動きが日増しに強まっていました。このとき、田中角栄と自民党の金権・腐敗政治の一掃が一つの大きな争点になりつつありました。

忘れもしません一九七三年、わたしは総理大臣田中角栄の上越新幹線にまつわる疑惑を国会で追及して、田中と自民党の攻撃によって二十日間の登院停止という不当な懲罰を受けたことがあります。

その田中が懲役四年、追徴金五億円の実刑判決をうけてなお居直り、政治を自分の思い通りあやつっているのをわたしは許せない気持ちでした。それだけにベッドに縛りつ